

# 西南40年 — 学院史をめぐる追想 —

後藤 泰二

## I

私は1956（昭和31）年から1996（平成8）年まで40年間、西南学院大学商学部勤務した。もっとも最初の3年間は研究生（九州大学大学院博士課程院生）の身分であったが、外書講読とゼミを担当した。

1959（昭和34）年、専任講師として採用されたが、すぐ教員組合の委員に選出され、ちょうど、小倉の西南女学院で起った紛争に支援を要請されて数人の委員と一緒にしばしば小倉に出かけ、団交の組合側のメンバーをつとめた。

女学院の争議が終って数年のち、今度は組合長をさせられることになったが、ちょうどその頃、西南学院では学院側から給与体系の変更が提案され、それまでのいわば年齢給から能力給に変わるようになった。

幸い賃金論が専門であった書記長の前田實教授に詳しく検討していただき学院側と団交して受諾した。続いて定年も65歳から68歳への延長を受け入れ、ひとまず私の任期中の団交は終った。給与体系が能力給になったことと、定年が68歳になったことで、労働条件はひとまず近代的な形を整えることができた。当時の学長は古賀武夫教授であった。

他方、連合教授会では学長から学生の定員増が提案された。初め、文学部も商学部とともに増員したいとの提案であったが、英文学科はクラス中心の講義であるというので増員を見送り、商学部のみ増員となった。

私はそのとき、これでは文学部と商学部との学生の質の差はますます広がるだろうと思った。しかし大学の財政上の理由から増員は必要であり、商学部がそれを引き受けることはやむをえないことだと考えた。そのかわり商学部に大学院をつくろうと思った。

## II

1971（昭和46）年4月、私は教務部長に選出された。学長は船越栄一教授になっていた。最初の部長会議で、当面の西南の仕事は入試の改革と国際交流の開始だと言わ

れ、ともに教務部長の仕事だとされた。

## 1) 入試について

それまでの入試は、合格者の入学金等の納入締切が国立大学の合格発表後まで認められていた。つまり国立大学に合格しなかった受験生も西南大に合格していれば、それから入学金を納入して西南大に入学することができていた。それが西南の「愛の精神」だと考えられてきた。

理由は分らないわけではなかった。しかしそれでは大学の財政状態は良くはならなかった。私学はどこも国立大学の合格発表前に入学金等の納入を締め切っていた。それは私学にとって当然のことであった。それまでもすでに、この点を改善せよという声がきかれていた。

私は関係方面を説得し、対外的にも入試説明会などで高校の入試担当者に詳しく説明して納得をいただいた。そうしてやっと踏み切ったが、それでも2、3年あとまで国立大学の発表後に、西南にやってきて、何とかしてほしいと入学金等を持参する受験生がいた。もちろん私の責任で入学金等の納入を断わりお引き取りいただいたが、何とも辛いことであった。

入試説明会にもしばしば出かけた。九州一円から四国、中国地方とまわった。その地方の高校の先生方に集まっただき、西南のこと、入試のこと、など説明した。教務課の課長さんと係長さんが同行してくださった。

## 2) 国際交流について

教務部長のもうひとつの仕事は国際交流であった。アメリカのベイラー大学とニューヨーク州立大学とのふたつの大学と学生の交換をするという。両大学との連絡は法学部の大内和臣教授が当り、私はもっぱら学内と国内各方面との折衝を担当することになった。現在では国際交流は広く行きわたっているが、当時は皆目、見当がつかなかった。

私は文部省に出かけてそれらしき課に話をきり出した。その人はすぐ国際教育協会を紹介してくださった。

国際教育協会は駒場の東大構内の一隅にあった。まだ発足したばかりの、職員3人の小さな事務所であった。担当の若い係長といろいろな話をして「留学生別科」という部署をつくることにした。交流先大学からの学生の受入れ組織である。

当時、西南では国際交流を担当する事務室はまだなかった。西南の英文学科を卒業した女性が一人で事務全般を処理してくれていた。秘書課の片隅に机をおいてそこで交流の仕事をすべて担当してくださった。藤江康子さんという若い有能な女性であっ

た。西南の国際交流はこの人を抜きにしては語れない。私は今もこの女性に感謝している。

1971（昭和46）年、国際交流の規程をつくり、留学生別科の規程をつくり、連合教授会に提案して承認してもらった。気骨の折れる仕事であった。やっと承認をとりつけ、派遣する留学生を選抜し、先方からの留学生を受け入れて、まずはアメリカ・ニューヨーク州立大学オネオンタ校との国際交流を発足させた。

### 3) 副学長を辞退したことについて

やっとの思いで2期4年間の教務部長を終えようとしたとき、船越学長は私に今度は副学長をやってくれと切り出してこられた。当時、西南には副学長の制度はなかった。後藤をきっかけにして副学長制度をつくりたいということであった。私は即座に辞退した。大学の何人かの主だった人からも学長の意向が伝わえられた。私は強く辞退した。理由は心身ともに疲労困憊していたからである。何よりも苦しかったのは研究が全くできないことであった。寸暇を見つけて教務部長室から研究室に戻ると、すぐインターホンで学長秘書室から連絡がある。「学長がお呼びです」と。せっかく研究室に戻ったのにすぐまた教務部長室か学長室に行かなければならなかった。芝生を横切って研究棟から別の棟まで走っても5分はかかる。電話で済ませればいいではないかと思われるかもしれないが、それはできなかった。研究室に電話がなかったからである。今では信じられないであろうが当時、西南の研究室には電話がなかったのである。電話は研究室の各階の両端にあるだけであった。インターホンで連絡を受ける



大学院経営学研究科開科式で挨拶する後藤教授（1972年4月）

と廊下を走って電話室まで行き、そこで用件を聞かされるという具合であった。ほんとうである。これが昭和40年代半ば頃までの西南大の実状であった。

私は当時、学会で私の研究に関する論争にかかわっていた。応答する論文を書かなければならなかった。教務部長や副学長の仕事の合い間にできることではなかった。論争相手や学会に対する礼儀からもこれ以上の非礼は許されなかった。副学長の件は強く辞退した。

学長室でお詫びを申し上げたとき、船越学長は涙ぐんでおられた。その姿が今も目に浮かぶ。申し訳なかった。しかし私も限界にきていた。研究に戻りたかった。「田園まさに荒れなむとして」いた。40年たった今も申し訳ない気持ちでいっぱいである。

### III

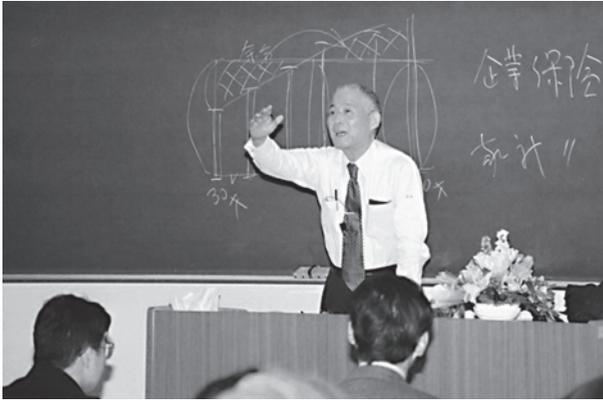
1) 論争が一段落し、延期させられていた在外研究(1977.3-1978.3)でロンドン大学へ留学した。ロンドン大学では研究に専念でき、研究者としてこれほど充実したことはなかった。

帰国してから半年もたたないうちに国際交流委員長を1年間(1978.7-1979.6)命じられた。それに引き続いて1979(昭和54)年7月、私は商学部長に選出された。いろいろ仕事があったが、私が教務部長時代に開設にこぎつけた大学院経営学研究科博士課程の院生が卒業を迎えていた。当初、危惧されていた博士課程の終了者の就職も多少の早い遅いはあったものの、まずは順調に進んだ。いま正確な人数は分らないが、私の担当した博士課程終了者だけでも十指を超え、各地の国公立大学でみんな研究と教育に励んでいる。

商学部長も2期4年(1979.7-1983.6)つとめたが、最初の2年間は学院の常任理事も兼務した。学費値上げで学生自治会の代表と団交もしたが、大事に至らずに過ぎた。

学部長を終えたあと今度は図書館長(1983.7-1985.6)、学術研究所長を各2年(1987.7-1989.6)、さらに入試委員長2年(1993.7-1995.6)をそれぞれ担当した。

役職通算のべ18年。研究生の期間を除くと在職37年のほぼ半分を役職で過ごした。研究生の3年間にいただいた研究費のお礼は十分に尽くすことができたと思っている。



後藤教授の最終講義（1996年1月17日）

2) 1996（平成8）年1月、満70歳となり、3月に定年を迎えた。そのとき本部事務局人事課長の高本博夫氏（のち大学教務部事務次長）が私の研究室に来訪され、私の叙勲の申請をしたいと言ってくださった。私はせっかくだがと答えてすぐ辞退を申し出た。高本氏は困った顔をされたが納得していただいた。

ちょうどその頃、東大経済学部の同期の会で何人かが叙勲を辞退したという話が出た。辞退の理由は「学徒出陣で戦死した友人たちに申し訳が立たない」「天皇制からはできるだけ遠く離れたところに立ってほしい」「人の仕事に序列をつけるのは反対だ、みんな一生懸命、働いている、だからこそ社会が成り立っているというのに」等であった。私もひとこと、芥川龍之介が『侏儒の言葉』のなかで書いている「小児」という箴言のことにふれた。それは「軍人と子供はどうしてあんなに勲章をほしがるのでろう」という短文のことであった。何人かが、そういえばあの本の中にそういう文章があったなあと応じてくれた。

それはともかく、叙勲の申請を辞退したことについて当時の西南大の当局と高本人事課長に心からお詫びとお礼を申し上げたい。

3) 私は西南大に勤務した40年間に毎年20人余りのゼミを担当した。合計900人を超える。そのうち福岡周辺に住んでいる諸君が毎年40～50人集まってゼミのOB、OG会を開いてくださる。遠方からの諸君も加わり、たのしい、実にたのしい集まりである。

私はこの集まりを西南からの私に対する叙勲だと思っている。ありがたいことである。心から感謝している。

2014（平成26）年、私は88歳になるが、この集まりが私の米寿を祝ってくださるという。すでに名簿も整い会場も西南大のクロスプラザ2階に予約して下さっているという。それまで何とか健康でいたいと心から希っている。